徳島・佐古川における青石の石垣の形成と展開*

The formation of ishigaki landscape using locally produced stone on Sakogawa in Tokushima*

三宅正弘**・庄野武朗***・市川宏規****

By Masahiro MIYAKE**　Takeaki SHONO***　Hironori ICHIKAWA****

Abstract

This thesis studies the formation process of the Sako River and stonewalls of this river. There were many quarries on the riversides of foothill. And stonewalls were built on the both riverside. This landscape is different from both sides. But all ston ewalls has been built and most of these stones are local quarry in Tokushima. That is so-called Aoishi. I also consider the formation of the landscape by the use of local stone.

1．はじめに

徳島城下の佐古川（吉野川水系佐古川）は、城下町の形成にともない開発が進む。佐古は、同時に徳島城石垣用の石材が採石された場所でもあった。佐古石とも命名された産地でもあり、佐古川はその積み出しにも利用された。徳島城下では、佐古石も含め地場の変成岩である青石が主要な土木石材として利用されてきた。この佐古川にも青石（阿波青石・緑泥片岩）による石垣が形成されている。だが、藩政時代の整備時においては、この護岸整備が一体的に行われた可能性も否めないが、今日では、佐古川に接する個別の敷地単位で個々の石垣が施されている。本論は、佐古川の開発の変遷を明らかにするとともに、そこにおける地場石材・阿波青石の石垣の実態を報告するものである。

2．徳島城下町と佐古石からみた佐古川

阿波踊りのお囃子に「大谷歩けば石ばかり」という箇所がある。大谷とは眉山に沿って山裾を流れる佐古川（別称：大谷川）の右岸側（山側）の旧名であり、その山手側が藩政時代の藩の御石口となり、御石口御役所（石口御番所）が置かれていた。それゆえに「石ばかり」とあるのは当然のことであろう。御石口は、佐古川（延長約2100メートル）の流域のなかでも最も城に近い場所であり、積み出しにも適地であっただろう。一方で、城から最短距離の山（石切場）が開発されると、そこでの採石が限界となり、それより近い場所の開発はない。おのずと採石場は、遠くに求めなければならず、佐古川を上る（西側へ進む）こととなる。

*キーワーズ：青石　石垣　石積み

** 正員，工博，徳島大学工学部建設工学科

*** 学生員，徳島大学大学院工学研究科建設工学専攻

****非会員，徳島大学工学部建設工学科

（徳島県徳島市南常三島町2丁目1番地

TEL０８８-６５６-７５７８，FAX０８８-６５６-７５７９）

次に徳島城下町の視点から佐古川を見てみたい。佐古川は徳島城の西側（城西）にあたり、城から離れていくように延びている。流れは西から東で、川周辺地域の開発は、石材搬出のためと同時に、城に近接し、またこのような城の西側地域が、北側には吉野川、南に眉山に挟まれ限られた面積のなかで、西方面（伊予国境）へのラインとしての役割があった。だが、それに川幅も高瀬舟の通れる程度の佐古川の水運が用いられることはなかった。むしろ川の自然堤防上に伊予街道が発達する。そして城下町に組み込まれるなかで街道沿いには商家が建ち並ぶ。

佐古郷郷土誌には、「御用材の採取を取締り、其の西には一般使用としての石口があり、ここかた大量の石材を搬出していた」とあり、「石材は高瀬舟で遠くまで積み出すので佐古川奥深くまで水運の途が開かれていた」とされている[1)]。以上は、佐古川を佐古石の積み出しの川から見たものである。

元禄４年の「綱矩様御代　御山下絵図」[2)] に見られるように、佐古川の左岸（北側）は城下町中心部からの連続として市街化されている。左岸から一本目が伊予街道であり、その両側の市街化が確認できよう。

逆に右岸（南側）には、山沿いに道が見えるが山裾に諏訪大明神など寺社が点在するのみで市街化はされていない。この地域の開発は、山手より、むしろ伊予街道北側地域にグリッドの区画がとられている。

そして佐古川には、2本の橋の架設がみられる（現在東から船場橋、佐古新橋、佐古橋、常盤橋、清水橋、相生橋、稲荷橋、諏訪橋、恵比須橋、大黒橋、無名橋、愛日橋）。城側に佐古橋、諏訪大明神の門前の諏訪橋であり、それぞれ８間2尺、４間半と記されている。いずれも北詰に左岸側に荷揚げの段が書かれている。それらは左岸の商家の荷揚げに使われていたと考えられ、佐古川が、元禄の時点で、単に山からの石を積み出すだけでなく、街道沿い商家の水運にも利用されていたことがわかる。

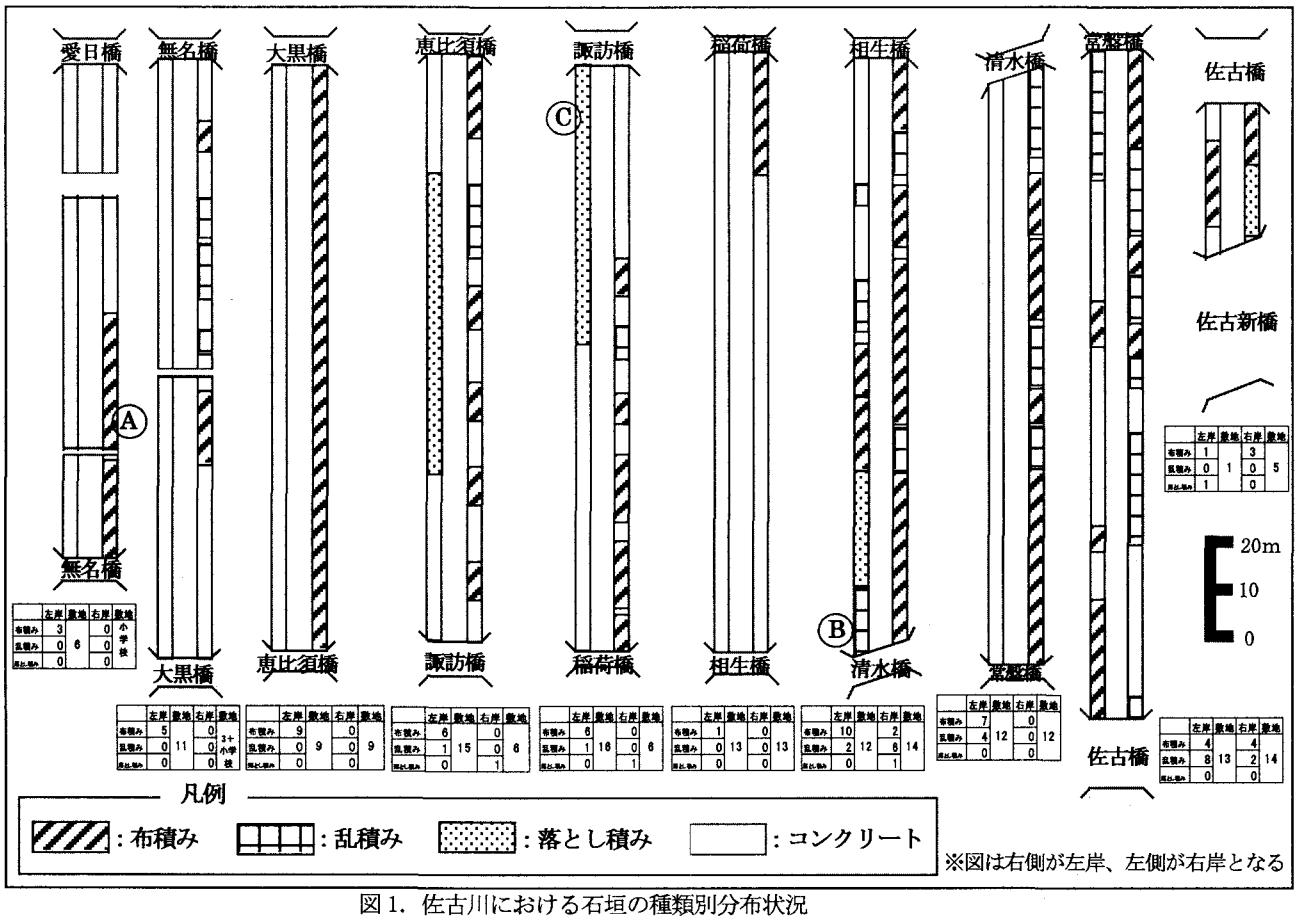

図1. 佐古川における石垣の種類別分布状況

（但し、図中の表の敷地数は、川に面している敷地の数とする）

3．青石の石垣の多様性

最後に、この佐古川における石垣の考察を行いたい。元禄4年絵図には、佐古川の左岸に沿って書かれているのは石垣と考えられる。諏訪橋より２街区西側まで一体的に書かれている。それ以西には描かれてないことから、東側つまり城下町の中心に近い側の整備が進められたと考えられる。ところが右岸側には石垣がない。開発が進む左岸と対照的であるが、そこに左岸側の石垣が商家とは無関係でなく、その商家建築の景観を飾るものとして整備されたことも考えられよう。前記のようにここは石の最も集積する場所であり、その護岸に積まれていった石垣の石も、その石と捉えることも想像できよう。そして今日も、この左岸と右岸の石垣は対照的であり、前者に意匠性をもったものが形成されている。ところが問題は、今日残されているものが、元禄に見られるものか否かということ、そして、それらが佐古石か否かということである。

最後に、佐古川の石垣の現状を報告する。そこに積まれている石材は、一敷地（鳴門砂岩の石垣）以外は全て青石であるが、佐古石かは断定できない。現状は、図1に示すとおり、左岸側で敷地数108に対し、石垣部分68箇所、右岸側で敷地数82に対し、石垣部分20箇所である。また左岸側で布積みは52箇所であり、左岸側の典型例であるといえる。また、現在見られる石垣の種類は大きく分けて布積み、乱積み、落とし積みの3種類で、図2、3、4に示すとおりである。

そして現在、戦災をうけたこの地区で建設年代が明らかなのは、図2に示す布積み（図1のA地点）の石垣は商家蔵と一体的に施されており、この蔵の棟札に「明治十一年七月吉良日」と記されていることから判断できる。

図2. 布積み（図1のA地点）

図3. 乱積み（図1のB地点）

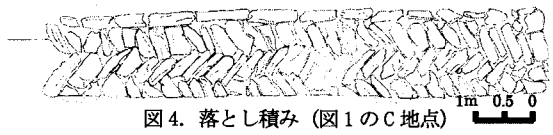

図4. 落とし積み（図1のC地点）

4．むすび

本論により以下の諸点が明らかになった。

（1）佐古川が藩政時代に石の積み出しとともに、左岸の商家の荷揚げや水運に利用されていた。

（2）石垣に時代的な多様性と、場所的な多様性が見られた。

（3）石垣の典型例が明治10年以前の施工である。

補注

1) 佐古小学校郷土史研究同人会：佐古郷土誌，1954, p273

2) 徳島市史編さん室：徳島市史，徳島市教育委員会，1973-1933，別巻地図絵図集